

薬とはさみは使いよう



薬と錠^{じょう}は使いようだ。67歳のYさん。「いやあ、センセの薬は効きますね。もの忘れが減りました」という。でも、ワッシーは、記憶力を改善する薬など出していない。それは、プラセボ効果（偽薬効果）というものだ。せっかくだから、黙ってしよう。

かたや63歳のA子さん。顔に痛みが走るといって三又^{さんま}神経痛の患者さん。「どこで診てもらっても良くない」といって。精密検査をしても、

思い込み

頭の中に異常はない。では、「この特効薬を」と処方するが、効果のほうはいまいちだ。それで、根気よく次々と薬を変えてみる。が、どれもこれも良い返事がない。それどころか、どの薬にも副作用があつて、のみ続けられないという。最後は、ワッシーもA子さんも疲れ果てた。しばし休戦だ。

A子さんの場合、こんなに薬が効かないのは、プラセボ効果とは反対のノセボ効果に違いない。A子さん

は、「薬は副作用があつてこわいもの」と思い込んでいる。で、ワッシーは一計を案じた。効果がなければ、副作用もない薬を処方してみたのだ。そして、実際、その偽薬でも、A子さんには忌まわしい副作用がいろいろと出たのだ。治療は、ここから再スタートした。

「薬は安全で、副作用などあつてはならないもの」と思っているひと

思わぬ効果や副作用

も少なくない。だが、残念なことに、ほとんどの薬には、治療をするための薬の主作用（薬の効果）のほかにいろいろな副作用がある。この副作用は、薬の主作用の副産物として避けがたいものだ。漢方薬はもちろん、サプリメントにも副作用がある。もちろん、どれも主作用の益が副作用に勝るから使われている。

繰り返す。薬と錠は使いようである。錠は、凶器にだつてなりうる。薬も錠も、うまく使うには、ひとの知識と知恵が要る。

（石黒修三 しいしぐるクリニック・脳神経外科専門医、金沢市在住）